

# 素面での全日本空手道選手権大会開催!!

### 第二十八回 全日本空手道選手権大会を振り返って

強化部長

安達

剛

財団法人全日本空手道連盟が発足して三十余年。昭和五十六年の第九回全日本空手道選手権大会から十八年間、装着を義務づけられていたメンホーを、昨年十一月に開催された第二十八回全日本大会から外すことに決定。全日本大会を振り返って、素面での組手試合の印象。また気になる県内大会の今後について、まとめて頂きました。



安全性を第一としたメンホーの装着

空手道の試合は、最初は何の安全具もつけずにして行われていた。しかし、スポーツとして安全性を重視し、子供から、また初心者も、いろいろな人が楽しめるように、何度かの変遷を経て、今の安全具着用のルールとなりました。

山形県内の大会は今まで通り、安全具を使用した大会として、多くの人がチャレンジできる様にしていきたいことが大切ですが、全日本選手権大会の県代表を選ぶ山形県大会(ニューメンホー)を使用は必ずしも優勝者ではなく、準決勝まで残った選手でメンホーを外したルールで残った選手を行うとか、又は県大会のみの結果だけでなく、全日本選手権大会で活躍できる選手を選考していく必要があると思います。

県内大会はメンホー装着。県代表の選考は改正が必要

山形県内の大会は今まで通り、安全具を使用した大会として、多くの人がチャレンジできる様にしていきたいことが大切ですが、全日本選手権大会の県代表を選ぶ山形県大会(ニューメンホー)を使用は必ずしも優勝者ではなく、準決勝まで残った選手でメンホーを外したルールで残った選手を行うとか、又は県大会のみの結果だけでなく、全日本選手権大会で活躍できる選手を選考していく必要があると思います。

この度の第二十八回全日本空手道選手権大会は、世界大会のルールにあわせてメンホーなしの大会で行われました。その理由として、日本は国内大会ではメンホーの着用を義務づけていますが、それが急にメンホーなしの世界大会ではなかなか勝てない状況がそこにあるからであります。以前は全日本空手道連盟競技規定を世界空手道連合の試合規定に置き換えて適用されてきましたが、それと同様であると考えてよいものと思われま

競技部長 工藤 清

まず基本的に空手道は、相手を尊重し怪我をさせないという寸止めの競技ルールを確立し、それに伴って安全具を導入して現在に至っています。次に私達は、安全具と防具とは根本的に異なることを認識しなければなりません。防具とは当てても良いという点、安全具は皮膚の一部であり基本的には当ててはいけないという点であり、防具と安全具とはその耐久強度も異なります。メンホーについては、当初は空気を入れる透明なビニール製品、その後現在の様なヘルメット型タイプになったが、すでにI型からV型まで改められています。現在主流になっている最も新しいものは後頭部が割れており、締め付けバンドも二箇所と少なく、かえって怪我が多くなっていることも周知の通りであります。今後の改良が早急に望まれます。

### 安全具の歴史

1964(昭和39)年	全空連発足
69(昭和44)年	第1回全日本大会を素手・素面にて行う。
74(昭和49)年	第1回インターハイを拳サポーター、エア式ボディプロテクター、ファールカップ着用にて開催。ちなみに上段攻撃はなし。また防具組手の試合も行われる。
82(昭和57)年	第37回島根国体(空手道競技第1回大会)をビニールメンホー、拳サポーター着用にて開催。同年第10回全日本大会でもメンホー、拳サポーター着用にて開催。
84(昭和59)年	第11回インターハイをビニールメンホー着用にて開催。
86(昭和61)年	第14回全日本大会をニューメンホー着用にて開催。
87(昭和62)年	沖縄国体をニューメンホー着用にて開催。
93(平成5)年	第20回インターハイをニューメンホー着用にて開催。
2000(平成12)年	第28回全日本大会を素面・拳サポーター・マウスピースにて行うことが決定。

月刊空手道参考

最後に、空手道の基本は攻撃即防衛、つまり防衛のない攻撃はないのであります。今まではメンホーによって怖がらずに攻撃ができたと思うが、メンホーがない場合はそれこそ確実にガードしながらの攻撃が求められます。この機会にメンホーがあるがなくなるが、攻防一体ということを改めてもう一度考えなくてはならないと思います。

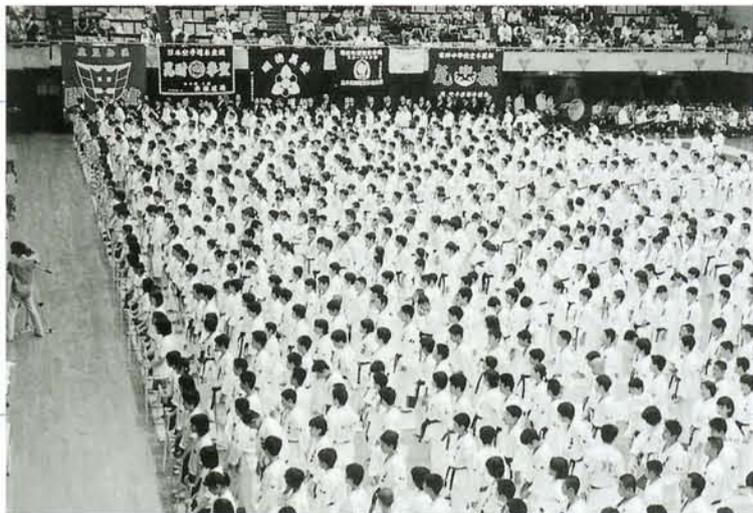
第八回全国中学生空手道選手権

# 大会報告!

全国から五〇〇人の中学生が東京武道館に集結。大人顔負けの好試合の連続。中学生たちが熱い闘いを繰り広げた。今回で八回を迎えるこの大会は回を重ねるごとにレベルアップ。国際大会、オリンピック出場を見据えた選手層の拡大、育成を狙いとされた大きな意味合いを持つ大会として定着してきた。山形からは県内予選大会を勝ち抜いた十五名の選手が参加した。大会報告、今後の課題について全国公認審判員である佐藤英俊氏にまかして頂いた。

## 「西高東低のレベル格差。県連中学生選手組織的環境整備が急務。」

全国公認審判員 佐藤英俊



平成十二年八月十七日〜十八日に第八回全国中学生空手道選手権大会が東京武道館で開催されました。山形県からは鶴岡五中、山形市立第四中、米沢市立第三中、大江中、日新中、八幡中が六月二十五日の県内予選会を勝ち抜き参加しました。私も、八幡中学の監督として初めてこの大会に参加をする事ができました。種目は女子個人組手でしたが結果として初戦敗退に終わり、対戦相手並びに大会のレベルの高さを見せつけられた結果となつてしまいました。地域的にも西高東低のレベル格差があったように思われましたが、

優勝、入賞した選手の中には、既にオリンピック出場を視野に置いて国際的、技術的、精神的強化を行っており、組織的な強

化の違いを強く感じさせられた大会となりました。県内中学生空手選手の場合、正式な部活動として練習を行っているところは少なく、学校側の支援はほとんど無い状態と言えます。所属道場の強化練習が中心となっているのが現状のようです。また、私自身としても、何度となく地元学校に諸協力の要請を行ってはまいりましたが、さほど期待するにたりない結果でもありました。学校側の第一条件が種目の中体連加盟が前提となっており、現時点ではとても難しいと言っています。



第八回全国中学生空手道選手権大会



▲八幡中 女子個人組手に出場 右が佐藤氏

せっかく小学校で習ってきたものが、中学生の時期で途絶えてしまう環境にあり、この子供たちが将来の空手選手として活躍するために中学生の環境整備を急いで整備する必要があります。他県では中学生強化委員会を設置している所もありました。強化練習についても成長過程にある身体をいかに強化するかを考えたメニューを策定すべきであり、また、試合等の日程についても学校毎に行事が違うこともあり、調整についても今後の課題となっているものと思います。

今後の組織的な環境整備を強く感じさせられた全国大会でもあり、県内選手が入賞、優勝出来る日が早く来てほしいものだと考えます。

## 大会参加の感想

### 全国大会に出場して

山形第四中学校 伊藤 翔



今回の全国大会は、自分にとって非常に意義あるものにする事ができたと思う。結果は、個人戦は、三回戦まで、団体戦は一回戦敗退であった。が、それ以上に今まで道場の仲間達と辛い練習を一緒にがんばってきたことや、全国のレベルを肌で感じる事ができた事、これからの自分にとって一つの大きな糧となる

ことだろう。

また、自分を含めて四中の選手達は、今一つ、全国に比べると元気がなかったような気がする。もっと声を出し、「自分は勝ちたい!」という気持をもっと、もっと前面に出していったら良かったと思う。

自分は今年度で中学を卒業し、道場へ行く機会は減ってしまうと思うが、今まで熱心に御指導して下さった深瀬瀬先生やコーチに深く感謝したい。また後輩達は、来年の全国大会に向けて増々、一生懸命にがんばって欲しいと思います。

### 全国大会の反省

鶴岡第五中学校 本間 梨紗



昨年私は、六年生だったけど、昨年の全国大会を見て、「選手になって、出場してみたいなあ。」と思い、毎回の練習をがんばりました。そのせいか、山形県代表の一人の選手として行けることになりました。鶴岡五中は、男子個人形、団体形、団体組手、女子個人形、団体形、団体組手に出場しました。

形に出た人は、(団体も含む)一人、精一杯がんばったと思うけど、自分的には、これから、もっともつとがんばって、きめができるようにがんばろうと思いました。組手では、女子団体が、ベスト16位に入ることができました。来年の目標は、ベスト8に入れるようにがんばりたいと思います。

今年の全国大会では、みんなが練習の成果を十分発揮できたとおもうのがよかったです。来年も出場できるように練習を一回一回大切にしていこうと思います。

たいへんよくがんばりました



山形市立第四中 男子個人組手・男子個人形に出場

大江中 男子個人組手・男子個人形に出場

米沢市立第三中 男子団体形・女子団体組手に出場

鶴岡五中 団体組手・団体形・個人形に男女とも出場

日新中 女子団体組手・女子団体形に出場



